

エドゥアール・ロックの 「記憶の動き (memory movement)」考

国立音楽大学 関 典子

〈目的と方法〉

エドゥアール・ロック (Édouard Lock, 1954~) は、カナダを代表するコンテンポラリーダンス・カンパニー「ラ・ラ・ラ・ヒューマン・ステップス」を主宰する演出・振付家である。1980年のカンパニー結成以来、その極限的な表現は多くの振付家に影響を与え、また、近年ではネザーランド・ダンス・シアターやパリ・オペラ座バレエ団に作品を提供するなど、コンテンポラリーダンス界の牽引者としての地位を確立している。

ロックの振付の最大の特徴は、分析不可能なほどに高速で、暴力的なまでに過酷なムーヴメントの横溢にある。1990年代前後の舞踊界を席捲した「水平の回転」と称される独特の跳躍や、近年のポワント技法の駆使など、身体の限界に挑戦するような超絶技巧の探究を続けるロックであるが、彼はまた、何の変哲もない日常的な身振りを取り入れ、それらを複雑かつ精緻に構成することによって、独自の表現世界を創り出している。

本研究では、筆者によるインタビュー¹と映像資料をもとに、ロック自身が「記憶の動き」と称する彼特有の振付の意図を探り、さらにポストモダンダンスにおける日常動作の導入との比較から、その独自性を明らかにすることを目的とする。

〈結果と考察〉

ロックは自身の振付方針について、「完全に動きだけを見せるもので、物語性や意味性は排除している」と常々述べているが、それらの抽象的な動きは、ただ無機的に展開されるのではなく、様々な情感を滲み出させるものでもある。なかでも、四肢が引きちぎれるかと思われるほどの瞬発的な回転や跳躍が至近距離で繰り出されるスリリングなデュエットの合間に織り込まれる上半身を中心とする意味ありげな動き (口を拭う、こめかみを撫でるなどの日常動作) は、その他の抽象的な技巧とは別種の存在感を放ち、ある種の既視感を覚えさせる身振りとして、鑑賞者の眼に飛び込んでくる。これがロック特有の「記憶の動き」である。

日常動作を通常の意味体系から外し、純粋な動きとして舞踊に導入する試みの先駆者としては、ポストモダンダンスにおける「ファウンド・ムーヴメント」や「レディメイド・ムーヴメント」が想起される。しかし、ポストモダンダンスが、舞踊と非舞踊の境界を問い直す過程の中で、テクニクを捨て、立つ、歩くなどの日常動作そのものを

舞踊として呈示するミニマルな志向であったのに対し、ロックは、極めて舞踊的なテクニクと、誰もが日頃行なっているような些細な身振りを複雑かつ高密度に組み合わせることによって、身体能力を最大限駆使することを意図している。

また、ポストモダンダンスが、観客のための舞踊よりも「踊る主体にとっての内的な経験を第一義」²としたのに対し、ロックの「記憶の動き」は、観客を巻き込むための戦略として機能している。ロックによれば、抽象的なテクニクと具象的な身振りを融合させることによって、観客は自身の行動や記憶に引き戻され、舞台と自身の世界とを重ね合わせて見ることになる。身振りで表現する限り、人はもはやニュートラルな状態ではいられず、それによって、両者は様々な次元でのコミュニケーションの関係をもつことができるのだ。

確かに、ロックの「記憶の動き」は、「身振りによる言語」「沈黙の声」³として、何らかの意味性を喚起し、ある種の言語的印象を観客に与える特異な動きである。我々が日常生活において身振り言語を用いるとき、その記号表現 (シニフィアン) と記号内容 (シニフィエ) は、通常、一対一対応の関係にある。しかし、彼の振付はその関係性を解除し、特定の記号内容を明示することはない。観客は、舞台上に継起する馴染み深い身振り、すなわち「記憶の動き」を目で追い、自らの体験にフィードバックさせながらも、決してある特定の解釈に至ることなく、翻弄される感覚を味わうことになるのだ。ポストモダンダンスにおける日常動作の導入は「非意味作用の実践」「記号内容のまとまりを不確定、あるいは無作為のものにするための方法」⁴であったとされるが、ロックは、動きの「無意味性」を主張しつつも、そこには「記憶」が含まれ、その「記憶」が何らかの「意味」や「身体的反応」を誘発せざるをえないことを認めている。つまり、ロックの「記憶の動き」は「人間の身体がもつ本然的な表現性」⁵を逆手に取った極めて戦略的な手法であると同時に、舞台と客席が共にあること、文字どおり「con (共有する) + temporary (一時の)」であることを成立させる有効なメカニズムとして機能していると考えられる。

¹ 2004年6月18日、彩の国さいたま芸術劇場にて実施。

² 外山紀久子『帰宅しない放蕩娘—舞踊のモダニズムとポストモダニズム—』勁草書房、1999、38頁。

³ La La La Human Steps, *Salt*, 1999.

⁴ Rainer, Yvonne. "Looking Myself in the Mouth," *October*, 17, 1981, p.68.

⁵ Margolis, Joseph. "The Autographic Nature of Dance," *The Journal of Aesthetics and Criticism*, vol.XXXIX, no.4, 1981, p.22.